

平成28年度 まちづくり懇談会

金沢地区会場の要旨

平成28年10月27日（木） 19:00～21:00

金沢地区コミュニティセンター 参加者 70名

市長あいさつ

市長：皆さんこんばんは。昨日今日と割と暖かい日が続いていますけれど、秋が深まり寒くなってまいります。体調管理十分ご注意くださいと思います。過日は、小宮祭大変お疲れ様でした。また私もお招きをいただきまして、ありがとうございます。10月9日も17日の山の神もなぜか私のいる間だけしっかり雨が降りまして、私がいなくなったら雨も止んで天気になってきました。どうも金沢とは相性が悪いのかな、なんてことを少し心配するわけですが、また、とろろ会にはそれを払しょくしたいなというふうに思いますのでよろしく願いいたします。本日は大変お忙しいところ、また、夜遅くお疲れのところ、28年度のまちづくり懇談会に大勢の皆様にご出席をいただきました。ありがとうございます。今年のテーマは、「茅野市の未来予想図 大いに語ろう」ということで、10年後どんな茅野市にしていきたいか。どんな金沢地区にしていきたいか。そんなことを大いに語り合いたいと思いますので、後ほどよろしく願いいたします。年度末になってまいります。今年は御柱祭ということで、区長さん始め役員の皆さまは大変だったと思いますけれども、有終の美を飾るべくご活躍されますことをお祈り申し上げまして、開会にあたりましてのあいさつとさせていただきます。今日はよろしく願いいたします。

金沢地区コミュニティ運営協議会連会長あいさつ

金沢地区コミュニティ運営協議会連会長：皆さんこんばんは。お忙しい中、またお寒い中、懇談会ということで大勢の皆さんにお集まりいただきましてありがとうございます。また、日頃から地区事業に対しまして多大なるご支援ご協力を賜りこの場をお借りして、感謝御礼申し上げます。本当にありがとうございます。今日は、先ほど来市長さんが触れていますように、未来予想図というようなことで、10年後の茅野市を考えるというテーマで、行政の方からお話をいただきながら、また、地区の方からもご意見をいただきながら、皆さんのより良い住みやすいまちづくりにしていきたいと思います。市長と膝を交える機会はそれほど多くありませんので、ぜひ忌憚のない意見交換をしていただければと思います。最後まで、よろしく願います。

—テーマと資料の説明 内容は宮川地区を参照—

意見交換

市民：今日は市長もお見えになっているので、市長のざっくばらんなお話を聞かせていただきたい。農業委員の立場で金沢の農業について、また、茅野市の農業についてこれからの在り方についてお話をお聞きしたいと思います。まちの活性化とこの10年言っていますが、農業が元気になるというのが一番のキーになるところだと思う。疲弊しているまちに活性はない。それは農業にある。というふうに私は思っている。昔、「豊葦原の瑞穂の国」とうたわれてきた。農業が1番ということ。市長もご存じのとおり、4月から施行された農業委員会法の大幅な改正により、金沢地区は農業委員が1名、農地利用活性化推進員が1名となった。なぜこういう風になったかということだが、金沢の経営耕作面積は、74町歩。茅野市内の経営耕作面積は1478。金沢の農地は5.5%しかない。ところが、この5.5%は御狩野の1町5反の畑、それから果樹園を含めて金沢の74haとなる。こんなに少ない面積を何人の人がやっているか。金沢には農家数が178戸。これは、2010年の農林業センサスの数値。1戸当たりの農地は、金沢では4反1畝の農地。一番多い湖東は、9反8畝くらいある。約1町近くのを湖東は持っている。金沢では、4反1畝しかやっていない。それを稲作で見るとどれくらいかということ、ほとんどの家庭は、3反部を切るのではないかと思う。3反持っていてコメの収入がどれくらいあるかということ、昨年農協の国の米渡しは8千円ちょっとだった。たぶん今年も1俵（60キロ）1万円くらいだろう。入ってくるのが1反当たり約10万円。3反で30万。先日、衆議院のTPP特別委員会で、青森選出の議員が、青森は農業県でありながら、30万から50万しかじいちゃんばあちゃんは収入がないんだと。ところが息子たちは、300万から500万の収入がある。たぶんここら辺の企業でも、若い人たちは500万くらいの年収があると思う。国民年金は7〜8万。施設に入るのに介護保険もあるが12〜3万かかる。私の知り合いで、山浦の方で大きな農家をやっている人から、じいちゃんばあちゃんが病気になったが、息子の厚生年金を取り崩していかないと、国民年金だけでは施設に入れることができない。という話を聞いた。金沢の狭隘な面積の中でやっていく場合に、10年経ったら百姓がいなくなる。これでいいのか。私はそば組合でやっている。現在金沢のそば組合は、25町歩、東京ドーム5杯分を6人の組合員でやっている。平均年齢75歳になろうとしているところ。いつまでそばをやっていけるか。市長に一度木舟から青柳まで国道を走ってみてほしい。あらゆるところがそば畑で、稲作はほんのわずか。大沢地区、入笠湖へあがるところの道を一度通ってみてほしい。全てそば。矢ノ口の裏はコメ農家はほとんどない。やってもわずかでみんなそば。果たしてこれでいいのか。国がやっている自給自足、金沢ではコメはとても作れない。こんな状況にあって、そば組合では、国や市からいろんな支援をいただいている。これは時限立法で何年か先にいつ切られるかわからない。そうなったら私達そば組合は立ち行かない。その時にこの荒廃した農地はどうするのか。深刻な問題で、考えただけでも空恐ろしい。私達のやっている25町歩の畑が、草ぼうぼう。これについて市の方では、地域就農者ということを行っている。そのために下限面積を下げた。今まで3反部なけ

ればだめだ、5反部なければ百姓はできないという下限面積の規則があったが、茅野市はそれを4月から泉野が5反部だったものを3反部に。どこでも3反部にしようと条例が変わった。新規就農者は、キャベツ、セロリー、パセリを作るのに収益がどのくらい上がったか生活ができるか。それには面積をどれくらいにした方がいいのか。ということで、今までの3反部とか5反部はなしだ。1反部でも収益が上がるんだしたら1反部にしようということで、産品別の下限面積を決めてもらった。これも市長のお考えでこうなったんだろうと思う。金沢に限らず、茅野市全体に今ある助成金を継続的、永続的、恒久的に続けてほしい。切らないでほしい。切るということになれば、この金沢地区はえらいことになるということを危惧してこの席で市長にお話を申し上げた。私は農業委員をやっているが、その割には農業をやっていないではないかといわれても仕方ないような発言をして申し訳ないが、本当に困る。今日そばをやっていたら、2人の方が、来年はコメを作らないからそばをやってくれといってきた。こうやってどんどん増える。30町歩になったらどうするのか。農業に対する市長のお考えを聞きたい。

市長：私の考えよりも皆さんの考えを聞きたいと思う。私のビジョンはこうだ。こうしたらいいのではないか。という話をぜひ聞きたいと思うので、またお聞かせ願いたいと思う。農業は本当に大きな問題。TPPの件もある。日本は少し前のめりにやっているが、肝心のアメリカがクリントンになってもトランプになってもTPPはやらないよという状況で、さあどうするんだという国家的な課題もある。農業を根本的に考えていくには、農地と農業を分けるということだろうと思う。それぞれよほど収益性の高い作物を作るなどしなければこの圏域の農業では食べていけないというのは自明の理であって、だからこそ皆さん兼業農家ということになっているんだろうと思う。兼業農家も含めて農家の皆さんが農地を守ってくれていることで、素晴らしい景観もできていると思っている。一つとしては、集落、農地を観光とどう結び付けていくのか。ということで収益性はだいぶ高くなっていくんだろうと思う。今までの農業としての農地の使い方から一歩踏み出す、そんな取組が必要になってくると思う。そうすると、農協さんとの関係をどうするのかという問題も出てくる。これも解決していかなければいけない。もう一つは、そばの将来性は置いておいて、集落営農という形を進めてきた。これもそこにある農地をいかに有効に使うかということになってくる。先ほど言われたように、今農業をやっている方が高齢になってもう農業はできないといった一つの表れが太陽光発電につながっていると思う。耕作できないから放っておいても金にならない。太陽光発電に貸せばいくらかでも金が入ってくる。あるいは売ってしまえということにつながっている。自然エネルギーは大事だが、それでいいのかと考えると、農地をどう活用していくかということに集落単位で今まで以上に真剣に考えていかなければいけないと思う。そういう観点からしてみても、農地と農業というものをうまく整理をしていかないと自分の農地で農業という感覚ではだめなんだろうと。農地を地域に提供できるよ

うな、そのことで大きいお金は入ってこないが農地として活用していけるそんなことを一つの方法として考えていかなければならないだろうと。集落営農を進めてきたが、5年くらい前から頭打ち。皆さん担い手がいない、やり手がいないと言いながら、なかなか一つにまとまってくれない。農家の皆さんにも意識改革をしてもらわなければいけないことなのかなと思う。私は、農業の専門でない。北原農林課長がいるので、意見を補足してもらえればと思う。そばは、補助金があるからできている。減反政策をやめて補助金を出さないといったとき、茅野市では140haくらいそばを作っている。塩之目も理科大の圃場の3分の1はそばでやっている。本当に壊滅するときに市でやれることで、即できることと言ったら国に代わって補助金を出すということになるが、それだと根源的な解決にはならない。そばも補助金がなくとも高く売れるそばができれば一番理想と思う。うまくていいそばができて高く売れる、そして100町歩以上のそばが生産される、まさにそばの里というような構想に持っていかなければいけないと思う。理想はそうだが実際につくってそこで稼げると言ったら並大抵のことではないなと思うがそんな思いでいる。ここで第5次の計画を作るので、かなり大胆な発想の転換でいろんな施策を考えていかなければいけないと思う。

北原農林課長：農業の関係は今農業委員さんから言われ、答えとして市長がいったとおりで、農業は地区から離していつてはいけないことと担当部局でも思っている。収益性を考えると、いかに農地を守っていくかということで、兼業農家でほとんどの方が金沢地区におられる。この実態を含めて今頑張っている方もいるので、そんな方とも話し合いの中で、金沢地区が何を求めていったらいいか考えたい。昔は菊とかりんごとか特色あるもので金沢を盛り上げていったという実績があるというのを農林課でもとらえている。これからの農業の振興のために新しい切り口としては、観光を取り入れた農業で収益性を高めるということを市長も打ち出しているので、それも十分含めた中で検討したいと思っている。いずれにしても、農業は捨てることができないし、土地を有効に使わないと金沢が荒れてしまうので、農林課としても頑張っていきたいと思っている。みなさんと意見交換しながらやっていきたい。

市民：高齢化社会の中で、金沢でも見守りの体制をつくるというのを重点課題として決めて取り組んでいるが、実際には難しいという実態がある。他の地区でも同じだと思う。今老々介護という言葉があるが、支え合いにはボランティアが必要で、実態はまさに老々ボランティアというのが実態である。人材の面も含めて困難がある。市全体としてもの辺の再検討が必要ではないかと思う。具体的には、一つは人材の確保。これは言葉では簡単だがなかなか難しい。例えば、市の職員、退職した市の職員も含めて市政に携わってきた方をボランティアの中に組み入れられるような仕組み、協力ができないだろうかといつも思っている。二つ目は、ボランティアの組織化。これも難しいことはよく

わかる。例えばボランティアの登録制度をつくって自分のできるボランティアに登録をして、それを活用するという仕組みができないかということも考える。三つめには、ボランティアの中身の問題。一部社協にも制度があるが、無償のボランティアは限界があると思うので、できれば有償ボランティアの検討ができないか。これを制度化、ルール化することで、ボランティアの体制を確保する、担保するということができないかということを考えている。提案です。

市長：3点お話になったが、ボランティアばかりではなくていろんな組織が抱えている共通するテーマだと思っている。まさにそれを解決していくために、ゆいわーく、市民活動センターを作った。組織の若返りや組織化への思いは、福島さんに話してもらった方がわかりやすいと思う。ボランティアは基本的に無償なので、有償ボランティアという言葉がはやったが、有償サービスという形で言葉を統一していこうと思っている。いくばくかの対価をもらってやるということも大事になってくる。そこらへんの取組の進め方は福島さんから。

福島センター長：私の前歴のお話をすると、辰野町のボランティアコーディネーターを16年間やってきた。さらにその活動の中から大学と関わることになって、大学の方で若者の地域づくりへの参画といったことの大きな絡みの中で、地域と大学を繋ぐコーディネーションをしてきた。辰野町にいたころも、ボランティアの高齢化というのはすごく大きかった。それにどうやって若者が参画していくのかというところが、どの地域でも大きなテーマだと思う。ボランティアの本質は、やらせたらだめ。自分のやりたいこと、できること、好きなことに関わっていくうちに、そこで出会った多くの方たちのお話を聞くことで、だいぶ意識が変わってくる。若者や30代、40代の方たちも、自分たちの出番と役割を見つけ出せるような環境づくりが一番大事で、これからそれをゆいわーく茅野ではすすめていきたいと思っている。直球で、自分の活動にぜひ参加してねというときは、そこにはなかなか人材がいなくてもいいかもしれないが、他の活動から出合った様々な人たちの動きを見て、またそちらを支援する人たちが出てくる。これは、30年近くコーディネーターとしてすすめてきた中で感じる。実績としても、いろんな若者が地域の中で参画してきた姿も見ている。やらせるのではなく、自発性をどう作っていくか。その中で人材育成というのは本当に大事なことだと思っている。ゆいわーく茅野では、様々な人たちの出番と役割をつくれるような人材育成の養成講座といったことも進めていきたいと思っている。登録の話があったが、登録はあまりプラスにはなっていない。私も最初登録と言っていたが、登録しても、登録した人が実際動くかと言えばそうではなく、自発的に動くその姿の中に、ボランティア活動もどんどん進んでいくと思う。登録は一つのツールではあるが、実績として登録は意味がなかったなというのは感じている。一人一人がその場で動いていく、そんなことを認めあえるようなそんな地域

を作っていくことで、どんどん広がっていくと思う。農業の話もあったが、実際にいろんな地域と関わって、若い人たちが組合を作ったりして、これまでにないような新たな取組をしている。地域とも関わってきている。伝統は大事だが、昔の形に固執することなく、新しい年代の人たちにも自分たちのやれるアイデアを取り入れていくことが大事なのかということ、いろんな人たちと関わって感じている。松本市に農業振興塾という30代40代の方たちがやっている活動があるが、その人たちがこれからの地域を担っていく大きな担い手となっていくと思う。親御さんとの経営方針も違ったりして自分の親との軋轢があってなかなか農業がうまく進まないというようなことも聞いているが、若手のメンバーでチームを組んで、年配の方たちと一緒に議論しながら、これからの農業の在り方を考えるところにも一緒に関わらせていただいたが、対話しながら新たな若い人たちの考え方をどう取り入れていくかというその柔軟性がこれかからのすべてのものに関わってくるところで大事なのかなと感じている。有償サービスについて、手法として、ボランティア活動だけでなく、今市長から話があったとおり、有償サービスということでNPO法人ができたり、他のNPOができたりしている。さらに、新たな手法としてのソーシャルビジネス。これはボランティアだけではなく、継続性を考えた時にお金も稼ぎながら進めていくという手法も必要になってくると思う。2日前に、北山のほうでやっている、ホットステイに参加させていただいた。そこで、やっていることは、ただボランティアの受け入れだけではなく、子どもたちが1人何千円というお金を出すのだが、そのうち半分を受け入れ農家さんにお渡しして、半分を組織の中で運営していくという手法を見て実際に聞いて、関わっている農家さんの姿もみさせていただいた。新たな手法として、全てがボランティアではなく、多少お金を出してもらい、さらにいただくことで責任ある活動になっていく。若い人たちがこれから地域のまちづくりに関わっていく中でも、そういった手法がこれから必要ではないかと思っている。

市長：これからゆいわーくが動き出す。実際動き出すと見えてくるものがたくさんあると思うし、そこでこんなこともできるねということも出てくると思う。ぜひ大いにゆいわーく茅野を活用していただきたいと思う。またそこでいろんなご意見もいただきたいと思う。

市民：今年高齢者クラブの役員をやった。金鶏の湯を金沢の高齢者クラブで予約をしようとしたら、拒否されてしまった。団体での事前予約はできないということだった。あそこは2部屋あって、小さい部屋でいいので、できれば高齢者クラブの利用なので、予約して料金を払って使わせてもらいたいと思ったが、窓口では拒否されてしまった。それで、今年は1回よそうではないかということになった。茅野市には無料施設でゆうゆう館があることは知っているが、だんだん高齢化してくると、地元でいいお湯があるので利用したい。温泉施設も、地元はだんだん家庭風呂になってくる人が多くなって、お

客さんも減り、厳しい経営に陥ることは見えている。私達の団体が使うのは、年間せいぜい2回くらいだが、できれば多くの団体の予約の受付を気持ちよくやっていただけるようになればありがたい。ご検討いただきたい。

市長 ゆうゆう館の方も大いに利用していただきたいと思うが、実際問題そこであればそこで利用ができれば皆さんにとっては非常にありがたいことだなということはよくわかる。また、そうすることで高齢者の健康づくりにもつながっていくんでしょうし、コミュニケーションの場にもなるかなということはよくわかる。運営は株式会社総合サービスのほうでやっているの、私が一存で来年からやるようにと言えないので、ご意見は承っておくのでよろしくお願いします。

市民 民生委員の立場で。金沢では、メリーパークへ直接行くという買い物バスを利用することを、金沢運協で音頭取りをしながらやった。10月からの公共バスで御狩野から出るバスの乗車状況はどうか。今までと変わらないか。

市長 まだ1か月が過ぎていないので、1か月過ぎたところでその辺の総括をする予定。

企画戦略課長 10月3日からバスの再編を行った。今までのビーナちゃんの組換えということで、週1便だったものを週2から3便ということで再編をした。また、10月3日から、10月14日まで、無料キャンペーンをやった。キャンペーンの利用状況は、金沢地区の状況はわからないが、全体としては1便当たり0.5人増えている。無料キャンペーンということもあるが、若干利用客数が増えている。利便性は若干高まっているのかなという傾向。10月15日以降集計をして、実際に料金を払って乗車される方がどれくらいいるかはまた把握をしたい。

市長 わたしにとっても気になる場所なので、また結果が出たらお知らせをしたい。
市長：10年後20年後というと消防の若い皆さんが、実際に子育てをして、生活の中心になるわけだが、何か意見はないか。消防団員の確保が難しいということだけではなく、自分の生活をしていく中でどうか。

市長：これまでの5か所の地区の会場アンケートの状況を説明
若い消防団の皆さん自分はこんな10年後がほしいみたいなことはないか。意見がないということは、今の生活に満足ということか。

市民：将来の茅野市ということで、資料では、資源循環型社会が一番いいところにあるが、循環型社会という中で、電気の関係、エネルギーの関係、茅野市はとても自然が豊

かな中で茅野市地域充足みたいな地域で満足できるようなことができてくるととてもいいと思う。特に今は原発などで電気の製造元の問題もたくさんある。その中で処理費用やなんだかんだできっとどんどん一般電気料が上がってくるんだらうと思う。よく新聞でみるが、小さい川で水力発電にも取り組んでいるようだが、もっと大きな方針のもとで地域の電気供給といったことを考えていっていただくととても心強い地域になるのではないかと思う。日本の中ではそういうことが実現している地域も出てきているようだが、何とかそんな検討がされると嬉しいと思う。

市長：再生可能エネルギーへの取組は非常に大事で、茅野市もエネルギービジョンの中で、それをうたっている。一つ太陽光の問題というのは違った側面から非常に悩ましい問題。たしかに誰も太陽光自体を否定する人はいないだらうと思うが、どういう形で設置していったらいいのかというとき、雑然と太陽光が設置されている。このことは、風光明媚な茅野市にとってはけっこう頭の痛い問題。太陽光も整然と並べてもらおうとそれほど見た目も悪くなく、必要に応じて植栽で目隠しでもしてくれればと思うが大きな問題だ。市としても、これから先どういう風にするのか。自然環境に配慮して、適切に太陽光発電を行ってもらおうよう、更に強く誘導していかなければいけないと思っている。メガソーラーはまた違った意味で悩みでもある。霧ヶ峰に計画しているのは、200ヘクタールでものすごい面積になる。いけないことにそこで降った水は全部米沢に流れてくる。場所は諏訪で、莫大な固定資産税は諏訪に落ちる。でも水は茅野に流れてくる。災害が起きるとしたら茅野。巡り巡って諏訪湖にはいくが。という問題もあり、いろんな面で頭が痛い。小水力発電もここへきて2機、泉野と北山にできる。茅野市においては落差があるし、小水力発電をもう少しうまく使えたらいいと思っている。上水道の水道管を使った小水力発電にもチャレンジする。可能な限り再生可能エネルギーの普及には努めていきたいと思う。第5次総合計画の中にどういう風に位置づけるかというのは、これからの検討課題になる。

市民：地域で見ると金沢は、北山に次いでの高齢化率。玉川みたいに広大な住宅を誘致できるような土地もない。地形からそんなに極端に人口が増えることは考えられないので、まさに支えあう仕組みづくりを地域として自分たちでやっていかなければならないという思いがある。今日ここに来ている皆さんは、多くがいろんな形の役員さんだと思う。現実それぞれの団体、役員が抱えている課題というのは、例えば役員の高齢化であったり、成り手がなかったり、高齢化と共にモチベーションが下がったり、気力も下がったりする中で、やらなくてはいけないのはわかるが、現実腰が上がらないというのが運協もそうだがたぶん多くの団体がそうだと思う。新聞で地域おこし協力隊を立ち上げていくような記事を見た。地域おこし協力隊をイメージした時に、我々が知識も経験もスキルも場合によっては気力もない中でやれやれと言われてもなかなかできない。雪か

きなどの有償サービスも立ち上がらない。やはり行政の方でそういう知識なりスキルのある方が現実に地域に入り込んで、場合によっては我々と一緒にこういう風にやっていくのだよと。いつまでも行政がやり続けるというわけにはいかないで、ある程度自立なり立ち上がったらあとはよろしくと。そんな活動に、行政として協力していただけるのであれば、我々ももっとやりやすいかなと思う。もう一つ、再編バスが0.5人増ということは、今まで金沢地区でもたぶん1便乗っても数人だと思う。数人がコンマ5増えたところで所詮数人の範囲。ところが、今運行している買い物バスは少なくとも15人、場合によっては20人を超えるようなこともある。大きくは無償というのが大きな要因であるのは間違いないと思うが、もう一つの要因は、帰りのバスの停留場。想像していただくと、買い物をして、極端に言えば帰りは両手に荷物を持って帰る。我々も乗ってみたことがあるが、バスのステップを降りるのにも前のめりになるので支えてやる。場合によってはあくまで運行経路上で自宅の近所に止めることもある。今の無料バスも2月で実験運行終了ということになっている。終了前提で考えると、新しい再編バスに乗らざるをえないと考えると、今言ったようにお金はもちろん無料の方がいいが、ぜひ100円というようなことも検討いただき、更に帰りのバス停のことも、なぜ利用しないのか、なぜ利用するのかという理由をきちんと押さえて、少しでも融通できるような運行にしていきたい。

市長：前段は集落支援とか地域おこし協力隊の制度がある。これは、今から活用しようということで募集もしている。地域おこし協力隊は、3年は国から補助がくるがそれ以降は自前雇うなりしないといけないので、少し使い勝手が難しいかなと思う。集落支援員は年度の制限はないのでそういった制度もこれから活用しようかなと思う。名前のとおり「集落支援員」なので、防災のことであったり、福祉のことであったり任務を持ってもらって、それぞれの地区であったり、集落に赴くということができる。そうすることでノウハウがないところに提言することができるかなと思っている。それと併せてゆいわくや地区コミュニティと連携することで、今まで以上に積極的な展開ができてくるかなと期待している。これは今年度補正予算で募集をしているので、来年度さらに充実させていきたいと思う。後段の方だが、10月から改正をさせていただいた。また結果等見ながら検証を重ねてマイナーチェンジはしていきたいと考えている。バス停でなくて降りられるかという、やろうと思えばできるが、乗せることはなかなか難しい。どういうところで降ろしてあげればいいのか。むやみに降ろすと交通事故にもつながるので、大きい車の通りが頻繁なところはなかなかできにくいと思うが、宿中のところは可能かなと思う。実際原村が一部の区間で降車のみをやっている。家の近くで降ろすことはできるので、検討協議会では話題に上がっている。まだ茅野市では運用していないが、それも一つの課題としては承知をしている。環境が整ったら試験的にどこかでやるというような形にはなってくるかと思う。

市民：中央病院が増築されて医療体制が整い嬉しく思っている。市長は組合長でもあるので、この機会にお聞きしたい。入院や手術の際には家族以外の保証人を求められる。現状は核家族化しているし、高齢者だけの世帯も多い。保証人を頼むのが非常に困難だという話を近所からも聞いている。これはもつともだと思う。親子でも今は保証人になれないという時代背景もある。昔は、高額医療を受ける場合に病院から示された一定の補償金を払って手術を受けるという時代があったのを覚えている。中央病院だけではなく他の病院もやっていることは知っているが、保証人の制度を少し考えられないかということを感じている。

市長 組合長ですが、医療のことに詳しくないので、今日のご意見をお聞きしたということにしておいてもらいたい。私も女房の実家のおふくろさんの手術の保証人になりしている。昔は、地域の中に親戚縁者がいて、保証人にはすぐになってくれたという時代だったが、今は、都会からこちらに来て、知り合いもない、親戚なんかももちろんないという状況だとなかなかしてくれる人もいないという方も確かにおいでになる。その制度自体をすぐ変えられるかというとお答えできなくていけないが、制度を変えなくてもだれかしらが保証人になるということをしてやらないと実際手術もできないという状況にある人もいるかもしれない。成年後見人などでなり手がいないと市長になる。年に1、2件ある。家族がいなくてなり手がなくて成年後見人に市長になるという仕組みがあるが、いろんな手続きを踏んで法的にも難しい部分がある。そういう制度とすぐ保証人とが折り合うということでないが、考え方としたら、どうしても保証人をたてなければいけないというときは、誰かがなってやらなければ手術もできないということになる。例えばそんな時は院長が院長の責任で保証人になるとか。こんな意見があったと病院には伝えて、現在できる回答をさせていただく。

市長：皆さんレベルの高い、いい質問をされていて、私が素朴な皆さんが感じているような意見を言いたいと思う。3年前この場に来て、金沢は今から12年前は3千百何人、3年前の話の時には2800人、今調べてみると去年までで、2700人弱で400人減っている。この減り方は北山と並んでいるということで、どうやったら地域が活性化するか整理はできているつもりだが、災害という話が出た場合に、今日本全国が地震だの、津波だの、川があふれたという話が出ている。この前区長会で、キッツで避難場所を提供してもいいという話があったが少し現実的ではないなと感じた。大災害が起きた時に私のうちから車で行くのも大変なところを歩いて誰が行くのか、望大橋は倒れたらどうなるのかと。茅野市の中では一番谷間で災害に弱いところになる。歴史的に調べてみると、地震があつて困ったとかいうことはないが、昔金沢の大火があつて、今の金沢宿ができたのが400も年前のこと。例えば、今の旭ヶ丘、昔天狗山といったが、そこに遺跡がい

っぱいあり、矢尻もいっぱいあった。私も金毘羅様につながっているそのところで矢尻を沢山採った記憶がある。隣の大沢のところにも芥沢遺跡があり、そこも矢尻が採れて遺跡の跡もある。阿久遺跡もある。先人が安心・安全なところを物語っている。意外とその現実を地域の皆さんも知らない。何千年も前にそこは、景色はいいし、日当たりもいいし、清水も出ていて住みやすいし、風水害に合わないと。私は逃げるとすると金毘羅様に逃げる。広いところがないと言っても旭ヶ丘がある。この前高砂さんとも半日話をしたがいいところだと。ということで、再認識する場所はあると思う。地域のいいところをもっとPRしないと。マイナスの話だけ先行すると。今日は消防の若い人たちが来ているが、金沢は人口が減っている。あれもないこれもない、地震が来たら地区センターも危ないと、こういったマイナスの話が先行しすぎると、さあ自分の家はどこに建てるか、東京から帰ってきて家に住むかといった場合に選択肢の一つになってしまう。若い人たちに聞けば、ややもすると、では宮川に行くか、玉川の神之原が広いからそっちに行くか、と判断してしまう人も多くなる。今どうしたらいいのかというのは高砂さんからアイデアをもらった。より金沢というところにもう1歩2歩踏み込んで、どうやったら金沢が良くなるかということを心配いただければありがたい。

市長：常々金沢のことはいろいろ考えている。地域づくりの中で名所づくり。梅の公園があるが、金沢はすごい梅の地区にさせていただきたいと思っている。なぜかというと、金沢小学校の校章は梅。かつてこの甲州街道には梅の木であふれていたということを知っていて、絶対地域の人が俺は金沢だと自慢ができる一つかなと思っているので、ぜひ進めてほしい。市もそれに対していろんな支援をさせていただきたいと思っている。そんな仕組みづくりをしているので、小林センター長にばんばんと活動してほしいと思う。金山を連合赤軍のころに全部埋めてしまったということを知ったとき、もったいないなと思った。一か所でもいいから掘り起こして、採れるか採れないかは別として発掘体験、これは金沢でなければできない。鉄山でやっても鉄では面白くない。やっぱり金だと。そこで一粒でも出ればそれは持って帰っていいよというような体験ツアーみたいなものができるだろう。千軒平のところの川で砂金を採るといような新しい体験が学習にもつながっていくと思う。そんなことも面白いのではないか。そうした取組をぜひやってほしい。安全面ではクリアしなければいけないことはたくさんあるだろうが、もそうならみんなのみでコンコンやってみたいじゃないか。そんな体験も金沢ならではの、できるかなと。甲州街道は今でも歩く人もいるが、もう少し掘り下げたウォーキング、そこにはしゃべりがうまくて人を引っ張ってくれるようなガイドさんがガイドしてくれて、梅の回廊を歩いて、おいしいそばを食べてみたい、そういったことはそんなに難しくないのではないかなと思う。これから知恵を出していきましょう。いうだけではだめなので、資金的な支援を新年度から始めてみたいと思う。

市民：金沢ボランティアの会の会長をしているが、ゆいわーく茅野と茅野市の社協はどのような違いがあるのかすっきりわからないので教えてほしい。

福島室長：今まで社会福祉協議会で行ってきた社協のボランティア市民活動センターがあったと思うが、どちらかというと狭義の福祉。本来はみんなの暮らしの幸せを求めるが福祉で、その分野は、福祉だけではなく、医療、環境、観光とか暮らし全般の分野を捉えるのが本来の福祉だと思っている。で、これまで社協のボランティアセンターが行ってきたのは、そこの分野の中の福祉。医療、保健、福祉という福祉の部分がすごく大きかったと思う。それを今度くらし全般の領域で関わる人たちも対象者ととらえていて、そうするとなんとなく福祉が薄まってくのではないかと思う人がいるが、そうではなく、いろんな分野で自分が好きなことに取り組んだ時に、歴史文化が好きだという方がいたとして、福祉には遠いように感じるが、歴史文化を進めていくとき、いろんな人とつながりができてくる。どんな分野にも必ず人がいる。環境も人がいる。そういったところで人と人との関わりの中にお互いに支え合いとか思いあいとかそういったことが生まれてくる。それが大きな福祉で、その中に、高齢者と出会ったとき、障害者と出会ったときにちょっとした気遣いがお互いにでき合うそんな社会づくりこそが福祉だと思う。今まで取り組んできた福祉が、全般ではなく、高齢者のための福祉、障害者のための福祉、そういったところが大きかったと思うが、それをこどもからお年寄りまでさまざまな人が関われるようなセンターになっていったらいいなと感じている。その部分が広がっていくと考えていただくといいかと思う。

市長：ゆいわーくには、社会福祉協議会の職員と市の職員がくる。一緒になって取り組んでいくので、社協でやっていた活動が変わることはなく、それもそのまま来る。他の活動も入ってくる。先ほどあったが、新たな出会いがあり、活動の輪が広がっていく、そんな展開になっていけばいいなと思っている。基本的に今までと変わることはない。

市民：西部福祉サービスセンターとゆいわーくとはどう住み分けをするのか。民生委員は今まで西部福祉センターを通じて行政とやり取りしていたが、民生委員で高齢者とか、子どもとかいろんな問題を抱えた時にどこへ行って話をするのか。今までどおり西部福祉センターが窓口なのか。

市長：基本的にフォーマルな、公的に位置づけられた制度や取組は、これまでどおり4サービスセンターで取り組むことになる。ゆいわーくは基本的に市民活動になる。民生委員さんが日々の活動の中で手助けしなければいけないという案件が出てきたときは、4保健福祉サービスセンターの方で、公的な支援をしていく。

依田西部保健福祉サービスセンター長：これまでどおりいろんな生活の場面については保健福祉サービスセンターが担わしてもらおう。ゆいわーくができたことで、一つの機関が増えた、相談できるところが増えた、活動する場所が増えたというような理解があると思う。サービスセンターもゆいわーくの一つのパーツにもなるし、社協も一つのパーツになる。全体をとおして新たな一つの大きな仕組みがゆいわーくでできるということで、一つ増えたと考えていただければいいと思う。

市長：例えば、障害のある方がいて、その方が何かの制度を使ってというときは、保健福祉サービスセンターで、障害がある方が、私たちもこんな活動をしたいというときは、ゆいわーくへ来ていただいて、障害のある方も、それをサポートする方も何かの活動を起こせる。そういう使い分けかなと思う。

市民：ゆいわーく茅野のことがわからなかったが、今日のお話を聞いて前の社協のところにできたのだと。中の内容を見させていただいて、果たしてこんなにできるのだろうかと思った。大風呂敷を広げたのではないかという感じもしないではない。具体的に細かくやっていただいて、協力できるところは協力したいと思っている。ボランティアに出るよというのであれば、仲間を集めて出ていきたいと思っているが、何をやらいいかわからないというのが現状。まだ働いているが、できる限り皆さんのためになって何かできないかという気持ちは持っている。建物のアピールをもっとしてほしい。建物の場所と内容の説明を冒頭でしてほしい。昨年金沢地区の代表区長をやらせていただいた。さきほどなたからか小水力発電の話があった。金沢にいろんなところから話が来て、一緒に立ち会って現地を見たりした。なかなか具体的な話にならないのは、いろいろなしらがらみがあって、話が途中で消えてしまう。大沢の川は一番水量が多いが、1級河川でだめだということで、少し話があっては消えるというのが現状。大沢の1級河川であっても、できる方法を茅野市でも考えられないか。県の問題などいろいろあるかもしれないが、もう少し研究していただいて、やる方法を考えていただきたい。あと、水道管の中に発電機ができないかとか、いろんなことで知恵を絞ってほしい。金沢地区からすると、フォッサマグナが走っているとか、断層が2つもあるとか、人が住みたくないという話ばかりで、後ろ向きの話しか聞こえてこないもので、まず、いいところを開いていく。我々が持っているいいところを出していくということで、金沢地区で悪い話ばかりして意気消沈しないで前向きな姿勢でいって、それに対して市にも協力していただくという方向で、具体的な話にしていただいて、協力できることは協力をしていきたい。

市長：百聞は一見に如かず。オープンして、具体的な活動が見えてくると、理解しやすいかと思う。正直、言葉でしゃべっている私も途中でこんがらがってきたりしてしまう。

スタートしていろんな活動が始まるので、皆さんにも来ていただいて、見ていただきたい。もちろん説明もしていくが、そうすることで、わかっていただけたらと思う。場所はパンフレットにも書いてはあるが、ささやかなので、PRは上手にしていきたい。小水力の活用だが、正直難しい部分は多々ある。一番は、安定した水量が1年をとおして流れているか。一定の規模がなく、冬場枯れてしまうといったことになるとう候補から外れてしまう。今、市の方でやっているところは、滝之湯堰と大河原堰で、年間通して一定の量が流れている。堰で農業用水であるため、関係者がOKしてくれればいいので使い勝手がいい。一級河川は結構うるさい。基本的には災害防止の観点からくるので、なるべくいろんな構造物は作らせないのが国の河川法になる。市でやっているのはみんな事業者がやっているが、採算性がそこでとれるかどうか。市で採算を考えずに大沢川に設置するといえどできないところはないと思うが、その意味があるかということになってくる。様々な要件をクリアした中で、最後は経済性も含めて判断がされていくと思う。市でも大沢川の上流で、計画してみたが、安定した水量が見込めないというのが一番大きい理由だった。5・6年前になるがそんな事情があったので、ご理解いただきたい。

市長：遅くまでありがとうございました。金沢の皆さんが、こんないい金沢にしていくのだといった思いを持って取り組んでいただくのが、まずは一番大事かなと思う。市としても素敵な金沢を目指して一緒に取り組んでいきたいと思う。

校長先生の木遣り

終了